様　式　Ｃ－４１

科学研究費助成事業　研究成果報告書

令和　２年　６月　10 日現在

機関番号：32608
研究種目：奨励研究
研究期間：2019
課題番号：　19H00001
研究課題名：住吉源氏絵に関する調査研究

研究代表者
菊地　絢子（KIKUCHI, Ayako）
共立女子大学・文芸学部・助手

交付決定額（研究期間全体）（直接経費）：540,000 円

研究成果の概要：住吉如慶作品２点、伝承作品５点の作品研究と比較研究を行った。17 世紀初頭に源氏絵制作された光則の源氏絵と、同時代の注釈書を通じて共有されていた源氏解釈という知との関わりを分析し、光則図様の形成について論じた。これによって、光則の新しい図様探求は、江戸初期に進展する注釈書をひとつの柱とし、光則が自らの源氏解釈を新たな図様に見出すかたちで再構成したことが立証された。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　近年、美術史研究や展覧会の場で注目される近世やまと絵における住吉派再評価の問題を源氏絵に焦点を当て①近世初頭の源氏絵作例の体系的な整理、②土佐派源氏絵と住吉派源氏絵の影響関係、③近世初頭に注釈書を通じて共有される源氏解釈と図様形成という議論を深めた点に学術的意義が認められる。また、作品調査に伴う資料生成（高精細画像、詞書翻刻）には社会的意義が認められる。

研究分野：美学・美術史 / 美術史

キーワード:日本美術 / 物語絵画 / 源氏絵 / 土佐派 / 住吉派 / 図様系譜 / 場面選択 / 注釈

１．研究の目的
（1）近世初頭の源氏絵諸作品を体系的に整理し、土佐派・住吉派における源氏絵制作を双方向的な影響関係から論じる。以下３点に着眼した、住吉派現存作品の調査と様式分析を行う。
　①如慶が、土佐光吉が集大成した「土佐派伝統図様」から学び取った要素の解明。
　②如慶と、土佐光則をはじめとする同時代絵師との影響関係の解明。
　③如慶・具慶が、土佐派との差別化を図るために創案した新図様の解明。
（2）17 世紀初頭の源氏絵と同時代の注釈書を通じて共有されていた源氏解釈という知との関わりの分析を、如慶に先行する光則の源氏絵図様の形成に焦点を当てて論じる。室町時代から土佐派源氏絵に脈々と受け継がれる「土佐派伝統図様」と光則図様を比較し、『源氏物語』の絵画化に同時代の源氏解釈を形づくった注釈書がいかような影響を与えたのかを解明する。

２．研究成果
（1）住吉派作品の調査研究
　近世初頭の源氏絵諸作品の体系的な整理を目的とし、住吉如慶あるいはその周辺の源氏絵作例に焦点を当てた、作品調査と作品研究を行った。
　諸作例の図様分析から現段階で判ることは、次の３点である。
　①基準作であるサントリー美術館本・大英図書館本は、一致する図様も散見されるが同場面を別の図様で描く図も認められること、詞書も絵が同場面を描く場合でも一致しない箇所からの抄出が認められることから、２作品は異なる図様系統を持つと考える。
　②Chester Beatty Library 本・早稲田大学図書館本の扇面は、54 図中３図を除いて人物のポージングやモティーフにおける細部まで図様が一致している。しかし詞書は、CBL 本が必ずしも図様と一致しない和歌を選ぶ歌絵帖であるのに対し、早稲田大図本は絵と一致する箇所の本文を抄出している。
　③基準作２作品と扇面２作品は、異なる図様系統である。室町期の源氏絵扇面画を起点に土

佐光信・光吉・光則へと図様が継承されるなかで、絵師が図様の再発掘と再構成を繰り返してきたことは既に明らかであり、如慶源氏でも従来の源氏絵図様に加え、如慶独自の図様構成が散見される。

（2）土佐光則の図様選択と源氏物語解釈

従来の源氏絵図様とは異なる光則の場面選択に提示される源氏解釈と当時に展開した源氏学との関係性を追究すべく、『岷江入楚』1598 年（慶長 3）を対照し検討する。本研究で 17 世紀初頭の源氏解釈のひとつの指標として参考とする『岷江入楚』は、細川幽斎の要請を受けて中院通勝が三条西実隆の講釈を基盤に完成させたものである。つまりは、幽斎が稙通から学んだ九条流の源氏解釈、通勝が継承してきた中世の源氏学の両方を継承するとして、重要な位置に置かれている。

①「栄華」の主体

17 世紀初頭の『源氏物語』注釈の流行と進展は、『古今集』などの和歌や『源氏物語』を含む「文芸を嗜む」という行為に宿った新権力が各々の文化的正統性を保証する権力装置として、権力者に用いられたことに起因している。

まずは、『源氏物語』ならびに源氏絵に内包される「栄華」に着目した。源氏物語世界を象徴する雅やかな図様である若紫帖の源氏が若紫を垣間見る場面は、源氏の愛の物語を軸にして『源氏物語』を読むとき、物語のはじまりを告げる重要な場面となる。一方で『岷江入楚』を参照すると、若紫帖は、藤原道長と御堂関白家の栄華というフレームを通して読むことができる。しかし光則源氏の若紫場面には、垣間見が選択される作例はほとんどなく、むしろ光則は、源氏が若紫を見出してから引き取るに至るまで、あるいは源氏が若紫に抱く恋着の有り様を描いている。

従来の若紫帖垣間見場面に、身寄りを失った少女が麗しい貴族に見初められるという、若紫にとっての栄華物語（シンデレラストーリー）というイメージソースがあるとするならば、光則は『岷江入楚』の解釈する道長の『栄華物語』に準ずるような「源氏の」栄華物語を描き出すのである。そして光則は、栄華の一部分を切り取って華々しく描くのではなく、源氏が栄華を獲得するまでの段階を、源氏栄華を象徴する紫の上との関係を軸に物語っていく。

②玉鬘物語の浮上

『源氏物語』は、複数の人物を主人公に各々の時間軸で進行する複雑な構造を持っており、源氏絵ではいくつかの物語に絞って場面が選択されることも多い。とりわけ、玉鬘を中心とした物語は省略される。源氏と玉鬘の物語といえば、たくさんの縁談が舞い込む玉鬘に対し、源氏は表向き父の顔をしながらも嫉妬し、玉鬘の婚姻が決まってもなお未練を残すという、これまでの恋愛関係において強者であった源氏の弱体化を浮き彫りにする物語である。

そのなかで光則は、徳川美術館蔵「源氏物語画帖」（以下、徳川本）に多くの玉鬘物語の場面を選択している。徳川本野分帖の図様である源氏が玉鬘を引き寄せ戯れる姿を夕霧が垣間見る場面について、『岷江入楚』には、玉鬘に下心を抱く源氏、それを不審に思う夕霧、源氏の振る舞いを快くは思わないものの素振りに見せまいとする玉鬘、との注が付けられている。光則源氏の構造は、紫の上（あるいは宮中の女性たち）との恋愛が源氏栄華の指標となるというものであり、玉鬘物語以降、かつてのように上手く女性たちとの関係を保持できなくなった源氏のエピソードを通じて、光則は、段階的に獲得した源氏栄華の「衰退」を映し出そうとしている。

光則以前の源氏絵は、王朝の理想像として源氏へ向けられた憧れのまなざしと雅やかな宮中世界を切り取って描くものであった。一方で光則が新しく成しえたことは、絶対的な権力を掌握する源氏を王権の象徴として明確に捉えつつも、これまで描かれなかった源氏の「衰退」までをも統合して源氏絵図様に提示することである。

３．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計　0 件）

〔学会発表〕（計　0 件）

〔図書〕（計　0 件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計　0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：

国内外の別：

〇取得状況（計　0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

４．研究組織

研究協力者
研究協力者氏名：

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。